

## 十七、護仏種性常使不絶

仏は久遠から永劫に、不滅に実在して、一切衆生を招喚したもうてある。その招喚の勅命に生きるもの、すなわち念仏の衆生である。往相の正定聚不退の行者である。したがって真実信心の行者は、如来正覚の華光中より化生せるものであり、如来仏性をその生命として生かされる人である。この行者なしには、如来といえども、人生に具体的になることはできない。

人、この世に生を享けたる、けつして、地位のためにあらず、名誉のためにあらず、まして享樂のためにあらず、大法を聞き、大信に生きて念仏申すこと、そのみ出世の本懐である。

だが、かかる仏道成就の大道は万人によつて承認せられるものではない。時に干万人中、一人の領解者があるのみであろう。大地はそれらの不幸の人をもつて満ちている。五欲の満足は、満足のように見えて、けつして真の歡び、本質的な喜びを与えるものではない。念仏中心の生活こそ、真に人生の悲しみを知り、真に人生の喜びを知る。

「仏法を主とし、世間を客人とせよ。」(『御一代記聞書』)  
謹んで頂戴すべきである。まことにこのご誠語どおりに、生活の根本的立替えをすべきである。

五十年も寺参りして、何もない同行がいる。何が間違いであつたか。五欲生活を主となし、その腰弁当に念仏をぶら下げたのである。こうした人に限つて、信心の速成に懸命になりつつ、教えを拝受することをぬきに、聴聞はただ、信心を得る手段にしていたのである。したがつてこの人は教主善知識を発見しない。

「仏法には、世間の隙を闕ぎて聞くべし、世間の隙をあけて法を聞くべき様に思ふ事浅ましきことなり。仏法には明日といふ事はあるまじき由の仰に候。『たとひ大千世界にみたらん火をもすぎゆきて、仏の御名を聞く人は、ながく不退にかなふなり。』と和讃に遊ばされ候。」(『御一代記聞書』)

こうした蓮如上人の厳しい教誡も、なかなか生きてこない。  
「どうも忙しくて、聞く暇がありません。」

しかし、あまりにもしなくてもいい事をしてはいないか。村会議員に当選したい。顔がふりたい。そうした積極に生きて時がないのは当然である。かかる意味でなれば人はよろしく大消極に生くべきである。「焚くほどは風がもて来る落葉かな」五合庵の良寛の大消極があつてのみ、一滴の涙に人の一生を動かすほどの大積極があつたのである。

純正光明団々員、それは、この世はすべて、念仏、求道、合掌精進、文字どおり歩みきる人のことである。しこうして、三人や五人は、かくのごとき人あるを思う時、私は合掌感謝せざるを得ない。

名高くないでもない。世間から褒められなくてもいい。だれに知られなくてもいい。ただ、信心の行者であれ。教えのごとく生きぬく人であれ。

強いとは、念仏一道を歩みきることである。

「念願は人格を決定す。継続は力なり。」

信心は淳一でなければならぬ。淳でないがゆえに決定がない。決定がないがゆえに相続しない。淳なる一心は必ず相続する。相続することすなわち力である。願力である。三不三心の教え、まことに頂戴すべきである。純一無雜の願に乗托して生きぬくべきである。

しかしそこには、幾多の困難な問題がおこる。世の常識者流の無責任なる賛否批判、障碍等々の困難な問題がおこる。しかし純一なる願心、それらにもさえられず、若存若亡を打破して、不退転に一道を往相するであろう。

悪意の迫害にも沈黙して求道せよ。恐ろしい誘惑にも勝て、いかなる苦悩にも随順せよ。念仏道のみが、第一義となるならば、肩の荷物は軽くなるであろう。

次は、遙かなる旅に出かけた同胞の手紙である。私の心は曇る。

「南無阿弥陀仏

先生、有難いお便り合掌して拝受致しました。道、人生の道を踏み迷う私を飽くまで抱きつつ精進せよの鞭を与えて下さいます先生の御心を感泣したことであります。いずれの世、いずれの所にも念仏を踏みつけた行動をする人があることは承知して居りましたものの、この○内の僧侶たちには少からず驚きました。旅の恥はかき捨てといったような気分が、濃厚にあるかのごとく見受けられます。その中に私の誓い(八月の聖講における)を打立てる事は、最難事であります。しかし、虐げる人、悪口する人、ばかにする人の中に、起こりくる自己の醜い心を見つめさせていただいております、涙の中に念仏しております。それがそこでの生活のせめてのことではありますが、それさえ破壊しようとする人がおります。実に悪僧どもではありません。ともすればその悪僧の中にひきずり込まれる私を仏前に合掌して見出さしていただいております。口に念仏し法を説き、法衣をまとうこの人たちの生活は、色であり名であり、財であり、眠であつて、その他の何ものでもありません。こちらに来て一番さびしいのは、いまだみ法をとにも語る友のない事であります。しかし私は幸であります。……以下略

私の子になつてくれた△△君よ。どうぞ遙かなるその地において、一基の尊い法塔となつてくれ。しこうして君の言う悪僧たちのように、財や、名のために墮落しないでくれ。もしどうしても念仏生活が成就しないならば、私のもとに帰つて来るべきである。われらはこの世には聞法合掌念仏の生活を営むために来たのだから。

多くの人に聞かせたい。一応そうは思う。しかし私はだんだんとこの思いから遠ざかってきた。深く歩むことだ。深く歩み、深く求め、深く深く内へ内へと歩み来る人は極めて少ないものであることを知った。たいがい途中で何かにひっかかっている。真実不退の歩みは、ただ深く教えに生きる人にもみ可能である。

ただ静かに、不退に求道し、精進し、念仏して、地下に埋もれて生きよう。ただ内に培え。黙々として内に充実せよ。しこうして地下に埋もれよ。これわれらの唯一の念願である。

仏種性は、いい加減な所で、求道も聞法も止め、いたずらなる運動屋になつて騒ぐ所に流れてゆくのではない。時と時とを繋ぐ今、純一に合掌念仏に生きる人によつて仏種性は護られてゆくのである。仏の生命は、ただ真実信心の行者より行者の上に流れてゆくのである。

周囲の寺院はみな場あたりのする講師を、入れかわり立ちかわりやとうて、説教興行をやっている時、君の寺だけは、真剣な求道聞法念仏の一道を歩む。周囲のすべてから反対され嘲笑され、迫害され、あまつさえ経済的には苦しくなる。無信心な門徒総代までが嘴を入れて、少しは世間を知れという。苦しいのが当然である。しかしいかに苦しくても、祖師の眼光をいかにする。如来の教勅をいかにする。

「故聖人の仰には、この法をば信ずる衆生もあり、謗る衆生もあるべしと仏説きおかせたまひたることなれば、我はすでに信じたてまつる、又ひとありて謗るにて、仏説まことなりけりと知られ候、しかれば往生はいよいよ一定とおもひたまふべきなり、あやまて謗る人の候はざらんこそ、いかに信ずる人はあれども謗る人のなきやらん、ともおぼえ候ひぬべけれ、かく申せばとて、必ずひとに謗られんとはあらず、仏の予て信謗ともにあるべき旨を知ろしめして人の疑をあらせじと説きおかせたまふことを申すなり。」

無信者、誹謗者の賞讃を求めて、自他ともに、三塗に沈みたまうことなかれ。正法を無視し、祖師を盲にするものは万古の寂寥なるべし。黙々堂々一貫の歩みを成就したまえかし。寺院はただ、大法のためにのみ存すべきである。

私を崇拜するという人がある。しかし三年たつても、聖講に一度も出席せず、聞法求道の真剣さもない。私はこの種の人となんらの交渉を持たない冷たい人間になつてしまった。私の話を一度も聞かずして私を謗る人とともに、この種の人には私にとつて路傍の人である。

ただ大法によつてのみ、私は人と一如一体を觀ずる。

光明団によつて名をなそうとする人とも、いずれはお別れあるべく候。

芸術青年型の人は、よほど自己自身を知り、厳しい教化に伏さないと、大道を健全に行歩することは困難であろう。秋の野辺に一人立つて月を眺めつつ物悲しくなされる甘き感傷が、念仏の境地と間違えられやすいがゆえに。念仏者はけつして、人生の隅つこでなされる、毒々しい煩惱の甘き感傷ではない。冷たき智慧であり、温かき大悲である。

説教に新式あり、旧式あり、講演に新式あり、旧式あり。説教に売談あるがごとく、講演にもまた売談あり。

天地は裂けるとも、売談をなすことなかれ。ただただ聖教のごとく如実に念仏修行すべし。健全に柿の色づくは尊し、虫熟れは、色いかに赤くとも手にする人なし。虫熟れ宗教家、虫熟れ同行、病膏盲に入ればついに救われがたし。

真実なる信仰は、必ず人に偉大なる力を与える。

師の心を知る弟子、弟子の心を知る師。師弟一致融合、まことに難いかな。師は弟子の世に栄えるを喜ぶが常である。しかし時に世に売れて悲しむことあり。

今はすたれたりといえども、古には、師資相承の厳しき礼あり。正しく法を嗣ぐことはきわめて困難である。

師の心を去りて、世にもてはやされんことをのみ求むる者、すでにカニの横ばいを習いたる人なり、正法の大器に非ず。真の師は、大衆を求めず、正法の大器一個半個を求むるか。

「親鸞は弟子一人もたず候」のご述懐、ずるき弟子に都合よく、「自然のことわりにかなひなば師の恩を知るべきなり。」の聖語、教権に都合よし。だれか真に聖人の真意を知る者ぞ。『歎異鈔』は時に、如来正法の鋭き刃であり、時に放蕩児の言いわけとなる。しこうして聖教はただの一文句といえども、煩惱を救うために存在して言いわけのために存在せず。

殺人者、なお救わるべし。

我慢強き英雄主義者これを打つに槌あるべし。

大悲観者必ず歡喜する道あるべし。

貪欲漢もまたあるいは尊き仏子たるべし。

されど、ついに自己を失い、魂の声をゴマ化しはてたる者、救われる日なかるべし。

前より見るも南無阿弥陀仏、後より見るも南無阿弥陀仏、大衆とともにあるも大法、独居せしむるも正法、しかも黙々として合掌求道し、貧困にも、迫害にも、不幸にも、風雨、寒暑、ついに厭うことなく、名を求めず権勢にこびず、念仏一道に生ききる正法輪の大器、一人国土に出現あらせたまえかし。